

☆ 注意欠陥多動性障がいのある子どもの理解のために

注意欠陥多動性障がいのある子どもを理解するために、基本的な事項について、「障害のある子供の教育支援の手引」を参考にしてまとめました。



「注意欠陥多動性障がい」とは

注意欠陥多動性障害 (ADHD: Attention-Deficit/ Hyperactivity Disorder) とは、身の回りの特定のものに意識を集中させる脳の働きである注意力に様々な問題があり、又は、衝動的で落ち着きのない行動により、生活上、様々な困難に直面している状態をいう。

*参考: 「注意欠陥多動性障害」の用語の取扱いについては、「DSM-5 病名・用語翻訳ガイドライン」において、「注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害」を用いることが推奨されている。

<注意欠陥多動性障がいの具体的な状態として>

ア 不注意

気が散りやすく、注意を集中させ続けることが困難であったり、必要な事柄を忘れやすかったりすること。

イ 衝動性

話を最後まで聞いて答えることや順番を守ったりすることが困難であったり、思いつくままに行動して他者の行動を妨げてしまったりすること。



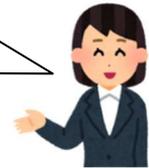
ウ 多動性

じっとしていることが苦手で、過度に手足を動かしたり、話したりすることから、落ち着いて活動や課題に取り組むことが困難であること。

注意欠陥多動性障がいのある子どもは「故意に活動や課題に取り組もうとしない」「怠けている」あるいは「自分勝手な行動をしている」などとみなされてしまい、障がいの存在が見逃されやすいことがあります。まずは、これらの行動が障がいに起因しており、その特性に応じた指導及び支援が必要であることを学校教育関係者や保護者が認識する必要があります。



「障害のある子供の教育支援の手引」には、障がいの状態の把握として具体的な行動を記述してあります。一部紹介します。実態を把握する上で参考にしてください。



障がいの状態の把握 (例)

不注意があること

- 学校での勉強で、細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする。
- 課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。
- 面と向かって話しかけられているのに、聞いていないように見える。
- 指示に従えず、また仕事を最後までやり遂げられない。
- 学習などの課題や活動を順序立てて行うことが難しい。
- 気持ちを集中して努力し続けなければならない課題を避ける。
- 学習や活動に必要な物をなくしてしまう。
- 気が散りやすい。
- 日々の活動で忘れっぽい。

衝動性があること

- 質問が終わらないうちに出し抜けて答えてしまう。
- 順番を待つのが難しい。
- 他の人がしていることをさえぎったり、じゃましたりする。

多動性があること

- 手足をそわそわ動かしたり、着席していてももじもじしたりする。
- 授業中や座っているべきときに席を離れてしまう。
- きちんとしていなければならないときに、過度に走り回ったりよじ登ったりする。
- 遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。
- じっとしていない。又は何かに駆り立てられるように活動する。
- 過度にしゃべる。

これらの状態が少なくとも六か月以上続いていること

以上のような障がいの状態から、忘れ物の多さや、人や物との衝突、危険な行動につながり、結果的に**対人トラブル**になってしまうことも見られます。そのため、周囲の大人からの**行動規制**、**注意叱責**を受ける可能性も高まります。子どもたちは、そのようなかわりの繰り返しにより、「自分はどうせ、何をしても叱られる」といった、**自己肯定感の低い投げやりな気持ち**や**無力感**に陥ってしまう可能性が高まります。

これらのような障がいにより起こり得る**二次的な課題**に対しては、子どもの特性に**早期に気付き**、例えば、**望ましい行動**を具体的に示したり、**良い行動**を見つけたらすぐに**褒めたりする**ような対応が効果的であると言えます。

